

9月例会は「おじいさんと草原の小学校」

特別例会「一枚のハガキ」と「映画大学 in 明石」の報告

7月18日の特別例会『一枚のハガキ』は、参加者数477人(会員144人、会員同伴12人、一般321人)と盛況の中、終えることができました。

また、7月27日から29日まで、第41回全国映連映画大学(in明石)が、明石駅北の明石商工会議所ホールで開催され、加古川シネマクラブは、明石シネマクラブとともに、現地事務局として協力しました。全国から114人の参加があり、この会からは9人が参加し、講師陣からたいへん興味深い話を聞いたり、交流会で会話を楽しんだり、充実した時間を過ごしました。

何とか、今夏の大きな事業を終えることができました。これらの行事にご協力いただきました皆様に厚くお礼申しあげます。

例会のお知らせ

■名称/第62回例会『おじいさんと草原の小学校』

■日時/9月14日(金) ①PM2:00~、②PM4:20~、
③PM6:40~



■場所/加古川総合文化センター大会議室(JR東加古川駅から北へ徒歩10分、車は加古川バイパス加古川東ランプ北へすぐ)

■会員の受付/入会手続きが終わっている方は、受付に同封の「例会参加券」をお渡しください。

入会手続きを行っていない方は、受付で4箇月分の会費(2000円)を支払い、入会手続きを終えてから、「例会参加券」をお受取りください。

【例会作品データ】

■タイトル/おじいさんと草原の小学校

■監督/ジャスティン・チャドウィック

■出演/ナオミ・ハリス、オリヴァー・リトンド、トニー・キゴロギ

■データ/2010年、イギリス、103分、ドラマ/ヒューマン

■作品紹介/アフリカ大陸ケニア。イギリスの植民地支配から独立を勝ち取った39年後の2003年、政府がついに無償教育制度をスタートし、田舎の小学校の前には何百人もの子供たちが押し掛けた。その中にただ一人、老人の姿が。今まで教育を受ける機会がなかったマルゲは、「文字を読みたい」一心で、馬鹿にされながらも、何キロもの道のりを学校まで来ては門前払いされる日々を繰り返していた。そんな彼の情熱に突き動かされた若い女教師ジェーンは、周囲の反対を押し切り、マルゲの入学を認めさせる。6歳の子供たちに交じり、初めて学ぶことの楽しさを体験するマルゲ。だが、50年前の悪夢は、毎夜彼を苦しめ続けた。独立戦争の戦士として闘い、愛する妻子や仲間を目の前で虐殺され、強制収容所で拷問にかけられた日々…。過去に打ち勝つため、未来を変えるため、マルゲは勉強を続ける。その情熱は、歴史を知らない幼い級友たち、そして政府までも動かしていく。(ホームページ解説から)

会員の中から複数のリクエストがあり、例会選定の運営委員会でも多くの支持がありました。

全国映連第41回映画大学 in 明石参加報告

第41回映画大学が、7月27・28・29日の3日間、たいへん暑い暑い中、お隣の明石市で開催され、加古川シネマクラブも運営委員を中心に9人が参加し、多くの方が現地スタッフとして協力しました。

今年は、山田洋次監督と井筒和幸監督らをお招きし、映画制作現場のことや、映画についての思いについて語っていただきました。その他、福島原発事故にはじまる原子力発電問題をテーマに社会問題とドキュメンタリー映像について、たいへん興味深いお話を聞くことができました。

27日は、第1講で『おくりびと』などの浜田毅(撮影監督)さんから「映画の時間」の演題で映画についての想いをお話いただき、第2講で『ミツパチの羽音と地球の回転』などの鎌仲ひとみ(ドキュメンタリー映画監督)さんから「ドキュメンタリーの力」の演題で放射能問題や現在進行形の福島原発問題につ

いて反原発の立場でいつもの元気のある話し方で御話をいただきました。

その夜は、全体の交流会では、明石の海の幸を賞味しながら、自己紹介やクイズなどを楽しみで、二次会、そして、井筒監督には予想どおり三次会まで連れまわされ、講義の倍以上の充実したお話を伺いました。



井筒監督のトークのようす

28日は、第3講で『パッチギ』などの井筒和幸(映画監督)さんに「オレの映画渡世」の演題で、映画に対する想いと、古今の映画についても、豪快な解説をいただきました。第4講では、松原弘直(工学博士)さんに「脱原発から持続可能なエネルギーソフト」の演題で、前講のオモシロイ話ではなかったですが、実に論理的なお話を伺いました。そして、第5講で寅さんシリーズなどの山田洋次(映画監督)には、いつもの「今、思うこと」の演題で主に日本映画の秀作について、また、来年公開の『東京家族』についてお話をいただきました。



山田監督

29日は、第6講で山田洋次監督の相棒と言ってよい出川三男(美術監督)からは「役者・演出に溶け込む映画美術」の演題で、今までに関わってきた撮影現場のようす、監督や俳優のこと、そして、前日の山田洋次監督の話に続き、小津安二郎監督の撮った『東京家族』と山田洋次監督が撮る『東京家族』についてお話しいただきました。第7講、実は私には最も印象深かったのですが、七沢潔(NHK放送文化研究所主任研究員)から「NHKのドキュメンタリー番組の歴史」として約50年間の硬派で社会に影響を与えてきたドキュメンタリー番組の制作者たちについてお話し

いただきました。水俣病被害の映像を初めて伝えたときの反響から、福島原発事故直後の行動まで、実に感動的でした。(ハインリッヒ)

特別例会の報告

7月18日の特別例会では、『一枚のハガキ』を鑑賞しました。

多くの参加者があり、午前の部を設け4回の上映を行いました。ことができました。結果的には今年の5月29日に逝った新藤兼人監督の追悼上映会となりました。戦争体験をもとに描いたこの作品に対しては、鑑賞者の多くの方から、映画の質や内容とともに、戦争がもたらす不幸について考え、あらためて戦争反対の気持ちを強くしたという意見が寄せられました。

この上映会の途中、配給会社からのブルーレイ映画ソフトの不具合のため、1回目の上映では30分以上、2回目は約2分、3回目は約8分、4回目は数秒の中断または画像の乱れがありました。不快に感じられた方には深くお詫びいたします。

参加者数 465人(会員 144人、一般 321人)。

運営状況

特別例会に多くの一般の来場者があり、入場料収入が予想以上にあり、今回の例会経費の負担が実質的にありませんでした。したがって、昨年度の今頃は8万円の赤字体質に陥っていたため心配していたのと対称的に、10万円を超える黒字にもち直していることになり心配な状況は解消しています。

会員数は、目標の200人を大きく下回ったままで、まだまだ安定運営とは言えませんが、特別例会のおかげで幸運にも一時的に持ち直しています。

この欄にいては、次号からこのヤボな「運営状況」欄は、再び運営が心配な状況になるまで、掲載を控えさせていただきます。

とは言え、会員の皆さんには、引き続きこの会のことをクチコミで宣伝いただきますようお願いいたします。(事務委員、宮本)

ご意見をお待ちしています

映画の感想や意見など、このニュースへ記事をお寄せください。200~300字程度にまとめていただければ助かります。おすすめ作品をファックス、メールや例会会場のアンケート用紙でお知らせください。

加古川シネマクラブ 〒675-0101

加古川市平岡町新在家 752-46 B-313 山本方

TEL 090-9283-0435 FAX 078-935-8528

E-MAIL cinemaclub@nifty.com

<http://homepage3.nifty.com/cinemaclub>

会員数 174人(7月18日現在)